

論文

非対面型授業における弾き歌い学習支援の成果と課題

扶 瀬 絵梨奈

1. はじめに

新型コロナウイルスによる感染症 (COVID-19) の影響は、2019 年 12 月に中国武漢で発生して以来収まるところを知らない。日本国内でも 2020 年 1 月 16 日に初の感染者が確認されて以来猛威を振るい続けている。厚生労働省によれば、2020 年 10 月 18 日時点で 2,856,161 件の PCR 検査が実施され、10 月 20 日現在では 93,480 例の感染者、うち 1,676 名の死亡者が確認されている。経済面をはじめとした国民生活は歴史的に大きな打撃を被り、未だ完全な収束への道は見通せていない。

2020 年 4 月 7 日には、新型インフルエンザ等対策特別措置法 (平成 24 年法律第 31 号。以下「特措法」) 第 32 条第 1 項の規定に基づき、新型コロナウイルス感染症 (同法附則第 1 条の 2 第 1 項に規定する新型コロナウイルス感染症をいう) に関する緊急事態が発生した旨が宣言され、全国 7 府県に対し発出された。その後宣言の区域変更がなされ、4 月 16 日には 40 道府県を追加し全都道府県が対象となった上、北海道、茨城県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、石川県、岐阜県、愛知県、京都府、大阪府、兵庫県および福岡県の 13 都道府県については、特に重点的に感染拡大の防止に向けた取り組みを進めていく必要がある「特定警戒都道府県」とされた。その後 5 月 4 日には、緊急事態措置を実施すべき期間を 5 月 31 日まで延長することが宣言され、実施すべき区域は引き続き全都道府県とされたが、同月 25 日には特措法第 32 条第 5 項の規定に基づき、緊急事態が終了した旨が宣言された。こうした状況の中で、高等教育の場では対面授業を前提とした従来の教育モデルが崩壊し、本学も多大な影響を受けた。本学では 4 月 2 日にクラスごとに分かれた教室で全館放送を用いた入学式が挙行されたが、特に新生は集団に帰属意識 (identification) をもつことができないままに未知のウイルスに対する恐れや外出制限によって、思い描いていた大学生活が突如遮断されたことによる不調も懸念された。

「令和 2 年度における大学等の授業の開始等について (通知)」(文部科学省, 2020) によれば、授業期間については「補講授業, 遠隔授業, 授業中に課すものに相当する課題研究等を活用し, 大学設置基準 (昭和 31 年文部省令第 28 号) 第 21 条等で定める学修時間

を確保するための方策を大学等が講じること」とされ、学事日程等の取扱い及び遠隔授業の活用に係る Q & A (文部科学省, 2020) においても、「例えば、2 コマ分に相当する授業時間を本来予定していた面接授業により行わない場合については、休日や祝日における補講授業の実施や、遠隔授業の実施、又は授業中に課すものに相当する課題研究等に代替すること等により、大学設置基準第 21 条等で定める必要な学修時間を確保する必要がある」と回答されている。高等教育機関を取り巻く環境は大きく変化し、対面型ではないスタイルによる学生の学修機会の確保、教育の質と学習成果の保証、メンタルヘルスのケアといった大きな課題に直面すると同時に、新しい教育モデルを検討していく機会ともなった。

筆者が本学で担当する「音楽 I (ピアノ、幼児音楽基礎)」(1 年次通年開講) のような演習科目は、とりわけ対面授業に頼らざるを得ない部分が多く、また楽器の演奏技術は個人差の大きいものである。対面ではない形で、教育の質と学習成果を保証できる新しいスタイルでの教育とは如何なるものであろうか。本論文では「音楽 I (幼児音楽基礎)」における、非対面型授業での弾き歌い学習支援の成果と今後の課題をまとめる。

2. 本学における対応

本学においては 4 月第 1 週からの前期講義開始を目指していたが、従前に定められた学年歴通りに進めることは難しく、COVID-19 の感染拡大による多大な影響を鑑み、短期大学 1 年生は当初予定より 1 週間遅れの 4 月 14 日から、2 年生は当初予定より 10 日延期の 4 月 13 日からの開始となった。しかし学内での新型コロナウイルス対策本部において授業開始日の再延期が 4 月 6 日に発表され、全学年の授業開始日は 5 月 7 日となった。当面の間、学内および学外での課外活動を禁止し、生活上の注意についてはリスクとなり得るプライベートの食事会やカラオケ等の集まりや夜間のアルバイトは自粛するよう学生へ求めた。また、健康管理に関しては、当面の間毎日朝夕の 2 回体温を測り、健康管理表に記載されている事項を各自でノート等に記録して健康管理を行うことが併せて周知された。その後、4 月 10 日には愛知県緊急事態宣言が発令、同月 16 日には国から特定警戒都道府県に指定された。

こうした状況のなか、本学では 4 月 20 日～5 月 2 日を自宅学習の期間と設定し、授業の課題を実施することが決定した。4 月 17 日の発送予定で各教科の担当教員から課題を郵送し、学生は自宅で各自学習を進めていくこととなった。また、学年歴に補講期間を追

加することも併せて決定した。前期の授業回数を確保するという観点から、これらの課題は授業2回分に相当するものとして発信するが、他方では授業1回1回の質を担保するという観点から学生との双方向的側面にも重点を置き、学生からの質問がある場合にはメールで応じること、授業再開後にはこれらの課題についてフィードバックをすることも併せて確認された。また、対面授業再開後の講義時間は、1コマにつき10分延長して「100分」として時間割を変更すること、5限のみ50分とし、終了時刻は18時のままとしながら、説明会、個別指導、補講の一部に活用することが確認された。

本学のコロナ禍における教授形態としては、第I～V期に分けて考えることができる。以下にその時期別の状況と音楽I（幼児音楽基礎）における指導内容を示す。

3. 各期の状況と指導内容

3.1. 第I期(2020年4月20日～5月2日) 遠隔授業期

授業の様式：課題提示式

出題方法：郵送

配慮事項：1年生は未だ教科書を購入できておらず、対面授業を一度も受けていない中での課題であること。2年生は購入済だが、学内ロッカー等に置いている場合も想定されること。学内だけでなく、図書館等にも立入りできない状況にあるため、外出せずに自宅内で取り組める内容と分量の課題を設定すること。

課題の提示には本学共通の様式を使用し、1科目につきA4サイズ1枚以内(両面印刷可)とされた。本課題は原則として、授業2回分に読み替えるものとし、授業の特性等により1回分としても可とされた。また、課題に取り組む上でのアドバイスや学生に向けたメッセージ等を記入できる担当者コメント欄も掲載された。音楽I(幼児音楽基礎)の出題内容としては、子どもの歌の弾き歌い曲〈おはよう〉と〈さようならのうた(おかえりのマーチ付き)〉の演奏とし、「確認しながら学習してほしい事項」を記載した注釈付楽譜を添付した。既に入学前教育¹で配布・説明している〈おはようのうた〉、〈おかえりのうた〉、〈おべんとう〉と併せて、計5曲の弾き歌い実技試験を対面授業再開後の授業内で実施する旨を併記し、試験当日はくじ引きによって各自の演奏曲が決定されるため5曲とも

1 入学予定者を対象とし、毎年入学前年度の2月初旬に本学独自で行っている講座。ピアノ講座のほかに、幼稚園見学の事前指導、AO入学予定者へのオリエンテーション等が含まれる。

よく練習しておくことを通告した。譜例内での指導事項としては、①前奏のカデンツァについて ②左手の伴奏がⅠ度→Ⅴ度進行、Ⅴ度→Ⅰ度進行となる場合の5指の動きについて ③Ⅳ度→Ⅴ度進行のポジションチェンジについて ④複付点音符について ⑤繰り返し記号について ⑥付点のリズムについて ⑦アルベルティバスについて ⑧後奏についての8点を注釈付楽譜に付記した形で指導した。加えて、学生には入学前教育において提示・進め方の説明を行った「名古屋柳城短期大学音楽Ⅰ・Ⅱ（ピアノ）グレード学習カード」（図1）に基づき、各々の学習レベルに合わせた《バイエル》や《ツェルニー》等の教則本曲の学習を進めることを引き続き課した。（楽譜の添付は無し。学生は各自で教材を準備。）

第Ⅰ期における教員側としての困難は、新入生の初回授業に対し紙媒体のみで指導しなければならなかったことである。学生は担当教員の顔も知らず、また教員側も学生の入学時レベルを知ることができないままに注釈付き譜例による共通課題を課す上では、ピアノ初学者にも経験者にも理解できる言葉を用いる必要があり、深見ら（2009）による「非対面指導者助言の効果」を参考にした。また、この課題が一方的な出題のみにならぬよう、学生との双方向性を実現するため、課題には教員の公用メールアドレスを記して質問にはメールで応じることを付記し、対面授業再開後には課題のフィードバックを行うこととした。

2020年度入学者用
COVID-19対応版

名古屋柳城短期大学 音楽Ⅰ・Ⅱ（ピアノ）グレード学習カード

- ・スタートグレードは、担当教員により決定される。
- ・このカードは授業毎に必ず持参し、合格曲およびマーチ番号に○印を付記する。
- ・グレード学習曲全てに○印が付かなければ、そのグレードを受験することができない。
- ・スタートグレードが1および2の学生は、2年次に音楽Ⅱを必ず履修し、4Bグレードまで認定されなければならない。

| グレード | 認定 | 注記 | テキスト | 学習曲 | マーチ | 弾き歌いレベル |
|------|-----------|--------------------------------------|------|--|------|---------|
| 1 | | 音Ⅰ：1,2,3グレード 音Ⅱ：4Bグレード | バイエル | 16・18・20・21・23・24・ 25・26・29・30・31・ 35・38・39・40 | No.3 | A |
| 2 | | 音Ⅰ：2,3グレード 音Ⅱ：4Bグレード | | 46・48・49・51・52・ 55・58・59・60・61・ 62・65・66・67 | No.3 | |
| 3 | | 音Ⅰ：3,4Bグレード | | 68・69・72・73・75・76・ 77・78・79・80・81・82・ | No.3 | A, B |
| 4A | 音Ⅰ：4Bグレード | 83・86・88・89・90・91・ 92・93・94・95・96 | | No.3 | | |
| 4B | | 97・98・99・100・ 101・102・103・104 | | | | |

| | | | | | |
|----|---|----------------|--|-------|------------|
| 5 | 右欄に記載のマーチを含む5曲に合格すること、および後期試験の課題提示日までに スタートグレードに合格すること、および後期試験の課題提示日までに 音楽I単位取得の条件とする | フェルニー 100番 | 3・4・5・6・8・10・11・ 12・13・14・16・ 17・18・19・21 | No.7 | B, C |
| 6 | | | 22・23・24・25・27・ 29・30・31・33・ 34・36・37・38 | No.4 | |
| 7 | | | 40・41・42・43・46・47・ 48・50・52・53・61 | No.6 | |
| 8 | | フェルニー 30番 | 1・2・3・4・5 | No.16 | C, D |
| 9 | | | 6・7・8・9・10 | | |
| 10 | | | 11・12・13・14・15 | | |
| 11 | | | 16・17・18・19・20 | | |
| 12 | | | 21・22・23・24・25 | No.18 | |
| 13 | | | 26・27・28・29・30 | | |
| 14 | | フェルニー 40番以降 | 第2回グレード試験(＝前期試験)までに、 2ページ以上の任意の課題曲を1曲演奏すること 前期試験より前に合格した場合、前期試験は自由曲を演奏 | No.25 | C, D, E |

| | | | |
|-----------|----------|---------|----|
| 学籍番号： | 氏名： | 担当教員名： | 先生 |
| スタートグレード： | 弾き歌いレベル： | 合格マーチ曲： | |

図1. 名古屋柳城短期大学音楽I・II(ピアノ)グレード学習カード(表面)

3.2. 第Ⅱ期(2020年5月18日～29日)遠隔授業期

授業の形式：課題学修型遠隔授業およびオンデマンド型遠隔授業

出題方法：e-learning システム「Web Class」

配慮事項：通信環境への配慮、e-learning システム利用上における問題のフォロー、遠隔授業期間中の学修状況の把握

第Ⅱ期からはe-learning システムを活用することとなった。本学で導入した「Web Class」は、面接授業を補充する遠隔授業等に活用するためのシステムである。授業再開に関して不透明なところがある中で、緊急事態宣言延長の可能性も含め、不安を抱えている学生に対する大学からの対策を講じる必要性からも導入された。学生は既に稼働中のCampus Planの学生ポータルサイトから利用する。履修登録のデータと紐づけられており、学生ポータルサイトにログイン→専用ボタンでWeb Classの画面へ移動→各科目の履修コース選択に進むことで利用できる。本学での遠隔授業の実施方法については、「課題学修型遠隔授業(こちらを主とする)」と「オンデマンド型遠隔授業」を中心とし、テレビ

会議システム等を使った同時双方向型の授業は実施しない予定とした。また、遠隔授業を実施する上での受信環境への配慮については、「大学等における遠隔授業の実施に当たっての学生の通信環境への配慮等について」（文部科学省，2020）にもあるよう、学生が高額な通信料を負担することにならないよう、動画等を用いる場合も低容量化に留意することが徹底された。また、このシステムを導入するにあたっては専任教員および非常勤講師に対しての説明会も実施された。

学生の自宅における IT 環境については、本学 2 年生のポータル利用の様子から、ほぼ全員に近い学生がスマートフォン等でインターネット閲覧ができていて、ただし自宅に PC やプリンターの無い学生は多数いること、自宅に Wi-Fi 環境の無い学生も多数いること、外出できれば無料スポットもあるが現状では利用できない可能性が高いことが学内で確認された。また、インターネット接続環境がない学生の対応については、事前申請による特例として、時間や人数を制限し自習室の利用を許可した。

深見ら（2009）は、「模範演奏 DVD の視聴を併用したピアノ弾き歌いの遠隔・非対面指導を実施し、指導前後の演奏を比較分析したところ、遠隔指導者が助言を与えた演奏の多くに改善が見られた」ことを明らかにしている。そこで第Ⅱ期での音楽Ⅰ（幼児音楽基礎）の授業内容は、まず 1 週目に第Ⅰ期のフィードバックとして、YouTube を活用した短い演奏動画を提供することとした。〈おはよう〉と〈さようならのうた（おかえりのマーチ付き）〉のそれぞれに①右手のみゆっくり演奏 ②左手のみゆっくり演奏 ③両手演奏 ④弾き歌い演奏、の演奏動画を添付した。それぞれ 30～80 秒の短い動画のため学生への通信負担は大きくなかったが、当時携帯電話キャリア各社で行われていた 25 歳以下 50GB まで無償提供のサービス等も、この第Ⅱ期には有用であった。加えて、①ミスがあっても止まらないこと ②付点音符のリズム感を正しく身に付けること ③弾く、だけにならぬよう「弾き歌い」で練習する癖をつけること ④子どもたちが歌唱に入りやすくなるような援助（歌唱に入る部分で「さんはい」「どうぞ」を添える等）について考えることを新たな課題とした。また、対面授業開始後には学生の様子を見ながら、学修に不足がみられる場合において補講期間中に音楽Ⅰ担当の非常勤の先生方とともにフォローすることを追記した。2 週目には音楽理論のプリントを課し、音価の復習、子どもの歌から指定された拍子の曲を見つける等、読譜に必要な基礎理論の知識を整理することとした。

第Ⅱ期終了後、Web Class 上にて履修学生に対しアンケートを実施した。

問 1. 弾き歌い曲課題〈おはよう〉の達成度

問2. 弾き歌い曲課題〈さようならのうた(おかえりのマーチ付き)〉の達成度

問3. 他の3曲の課題曲〈おべんとう〉〈おはようのうた〉〈おかえりのうた〉の達成度

問4. 子どもの歌の弾き歌い曲以外の曲(バイエル、ツェルニー等)の練習曲数

問1～3の回答肢は〔1〕片手でもまだよく理解できない、〔2〕片手ずつ弾くことができるようになった、〔3〕歌えないが、両手で弾くことができるようになった、〔4〕両手で弾き歌いができるようになった、〔5〕両手で弾き歌い、さらに歌唱援助「さんはい」等も言うことができるようになった、とした。問4の回答肢は〔1〕3曲以下、〔2〕5曲以下、〔3〕10曲以下、〔4〕15曲以下、〔5〕15曲以上、とした。図2にその結果を示す。

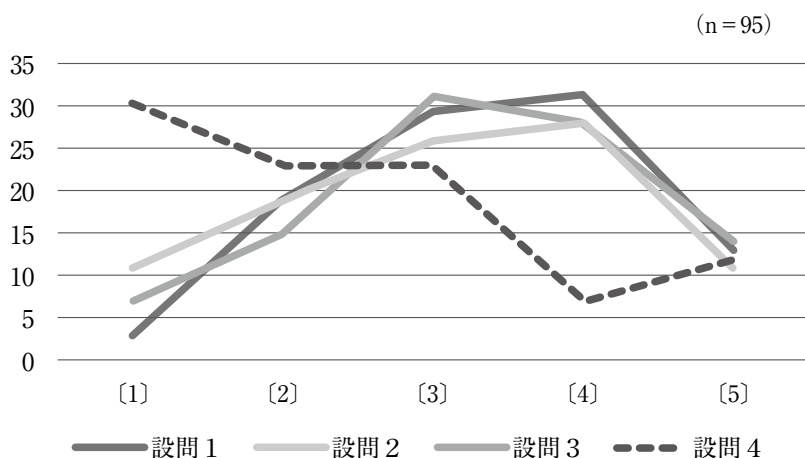


図2. 保育科1年生第Ⅱ期遠隔授業時のアンケート

入学後、未だ対面授業の機会が得られない1年生だが、遠隔授業期に課した弾き歌い曲についてはどの曲も7割を超える学生が「両手で弾くことができる」を達成し、うち4割を超える学生が「両手で弾き歌いができる」と回答した。対面指導が受けられない中、学生はそれぞれに奮闘した様子が分かるが、ここで両手演奏(歌唱無し)から弾き歌いへの移行をどう円滑にするかという課題が浮き彫りとなった。一方で、弾き歌い曲の達成度と反する値を示したのが「子どもの歌の弾き歌い曲以外の曲(バイエル、ツェルニー等の練習曲)」の課題である。おそらく、大半の学生が保育科へ入学したのちに触れることとなる「弾き歌い」について、興味をもったことの表れと推察する。また、弾き歌い曲には譜例を提示し予めの注意点等を通知したこと、「対面授業再開後には試験がある」という具体的な目標を持つことができたことが一定の成果を生んだと思われる。

YouTube を利用した演奏動画については、学生から「(スマートフォンを持ち運びできるので)自分で弾きながら動画を確認できるのが良かった」という声が複数あり、演奏動画を視聴した学生は95名中78名で、のべ701回の再生があった。渡会(2019)が「初心者に動画教材を与えると、はじめは読譜能力が身につかないのではないかという心配もあったが、かえって逆の結果となり、初心者の読譜能力は向上してきている。背景として、動画と楽譜を相互にリンクして見ていく習慣をつけることで、五線紙の位置を理解できるようになり、演奏につながってきているのだといえる」と考察しているように、入学直後である第Ⅱ期の非対面授業において、演奏動画を提示したことは有用であったと考える。また視聴率から、学生は遠隔授業期におけるモバイルコンテンツに対して大きな抵抗や混乱なく活用していたことが分かる。

3.3. 第Ⅲ期(2020年6月1日～24日)対面授業期

授業の様式：対面式

配慮事項：感染症防止対策、メンタルヘルスケア、遠隔授業期における課題のフィードバック

5月25日に緊急事態宣言が解除されたことを受け、学内の新型コロナ対策本部にて「面接授業の実施に関する当面の対応マニュアル」が制定され、第Ⅲ期からは対面授業が開始されることとなった。学生に対しては対面授業開始前に、感染防止対策の徹底(体調管理、手洗いの励行、マスクの着用)について指導するほか、教室の環境への配慮としては、各授業で感染拡大のリスク(①換気の悪い密閉空間、②人が密集している、③近距離での会話や発声の3条件が同時に重なった場)の低減に努めることが確認された。また、衛生管理としては各教室の出入口にアルコール消毒液を設置し、ピアノ、パソコンを使用する授業では、使用前後の手洗いを徹底するよう教員から学生に指導するとともに、適宜、消毒用のペーパータオル等を設置した。ピアノの鍵盤はアルコール消毒液や塩素系消毒液の使用によりケミカルクラック(ひび割れ)が生じてしまうため、ノンアルコールタイプのウェットティッシュを活用した。換気については、教室の窓の端を開けるなどして常時喚起を行うほか、授業の途中で10分程度の大換気(窓全面の開放や出入口扉の開放)を行うこととした。プリント等の配布物については、配布物を介した感染リスク低減のため、プリント等を配布する場合は、一斉に前から後ろに回したりせず一人ひとり配るか、教室

の前に置いて各自持っていく方法を取るなど、可能な範囲で工夫することが求められた。学生の座席配置については、飛沫感染防止のため、マスクを着用した上で厚生労働省が推奨する子どもの座席配置のイメージを参考に、学生相互が1メートル以上の間隔（又は1席空け）で着席することを基本とし、履修人数及び教室定員の都合により困難な場合は教室変更を行った。

ゼミナール、グループワーク、発声・会話練習等を伴う授業については、学生相互及び教員との距離、室内の換気等に配慮し、マスク着用の上、対面式で行うものはできる限り避けるほか、音楽等の実技では感染リスクを考慮して実施内容や方法を工夫して行い、その場合においては、授業計画（シラバス）を変更することは差し支えないことが確認された。ピアノ等楽器の使用前後には手洗いと口濯ぎを徹底するよう教員から学生に指導するほか、ピアノの個別レッスンではマスク着用の上、1教員が2室を交互に使って指導を行い、使用していない方の室では窓を開けて10分程度の換気を行うことを決定した。

3.3.1. 第Ⅲ期中の実技試験について

第Ⅲ期における音楽Ⅰ（幼児音楽基礎）の指導内容としては、まず初回の対面授業時に学生へシラバス改訂版を配布し、これまで4回分の授業を遠隔授業により行っていたことから学修順序や内容の変更について丁寧に説明を行った。その後、使用教科書²に基づき、読譜の基礎知識（音符・リズム・拍子）、音程の理解、音階と調について、季節にかかわる子どもの歌の中で指導した。また、音楽Ⅰ（幼児音楽基礎）では9回目の授業にあたる日（対面授業の4回目）に、第Ⅰ期～第Ⅱ期2週目の課題であった〈おはよう〉、〈さようならのうた（おかえりのマーチ付き）〉、〈おべんとう〉、〈おはようのうた〉、〈おかえりのうた〉の弾き歌い実技試験を実施する旨を併せて通知した。実技試験の実施にあたってはクラスを半数に分けた形で行い、本学が定めた「面接授業の実施に関する対応マニュアル」に基づいて行うこととし、発表者と聴講者との距離を十分に保った上でマスク着用を徹底するほか、窓は常時開け換気に努めた。課題曲5曲中1曲を演奏するための選曲は発表前に1名ずつくじ引きにより行い、実施後には「演奏曲」、「自己評価（100点満点）」、「達成点と反省点（自由記述）」の記入を課した。

以下に、第Ⅲ期実施の弾き歌い実技試験における自由記述欄の係り受け解析（表1、表

2 『幼稚園教諭・保育士養成課程 子どものための音楽表現技術—感性と実践力豊かな保育者へ—』 萌文書林、2018

2) を示す。解析には KH Coder を使用した。係り受け解析とは、名詞に係る形容詞、動詞について解析することである。スコアは、出現回数やその係り受け関係が全組み合わせのうちに占める割合などを複合的に判断し算出した数値であり、スコアが高いほど、よりその係り受け関係が重要であることを示している。また、単語の後に（否：50%）などと付いている場合、集計された係り受け関係のうち50%が否定表現（例：「高い」→「高くない」）として使われていることを意味する。また、名詞にかかる形容詞については、単語がポジティブかネガティブかどうかを添えた。

表1. 第Ⅲ期弾き歌い実技試験後の自由記述における係り受け解析（名詞－形容詞）

| 名詞－形容詞 | 出現頻度 | スコア | ネガティブ／ ポジティブの別 |
|-------------|------|------|-------------------|
| テンポ－速い | 7 | 7.00 | ネガティブ |
| 緊張－速い | 4 | 2.50 | ネガティブ |
| 声－小さい | 3 | 2.40 | ネガティブ |
| 元気－良い | 2 | 1.00 | ポジティブ |
| 歌唱－良い | 2 | 0.29 | ポジティブ |
| 援助－良い | 2 | 0.29 | ポジティブ |
| 声－出にくい | 1 | 1.00 | ネガティブ |
| 本番－弱い | 1 | 1.00 | ネガティブ |
| 子どもたち－歌いやすい | 1 | 0.67 | ポジティブ |
| 歌－小さい | 1 | 0.40 | ネガティブ |
| 必死－小さい | 1 | 0.40 | ネガティブ |

表2. 第Ⅲ期弾き歌い実技試験後の自由記述における係り受け解析（名詞－動詞）

| | | |
|-------------------|---------|------|
| 歌唱－できる（否：30.00%） | 10（否：3） | 1.31 |
| 援助－できる（否：30.00%） | 10（否：3） | 1.31 |
| 声－震える | 8 | 2.07 |
| 練習－弾ける（否：28.57%） | 7（否：2） | 0.98 |
| 緊張－震える | 7 | 3.23 |
| 最後－止まる | 6（否：6） | 1.14 |
| 最後－弾ける | 6 | 0.53 |
| 声－出せる（否：25.00%） | 5（否：1） | 4.00 |
| 歌詞－間違える（否：75.00%） | 4（否：3） | 0.77 |
| 緊張－弾ける（否：25.00%） | 4（否：1） | 0.35 |
| 余裕－もつ | 3 | 1.50 |

名詞-形容詞の係り受け解析では、テンポが速くなった、緊張して速くなってしまった、声が小さかったなど、自己の演奏への反省が上位に現れている。しかし一方でこれは、テンポや声量の大小は他者の演奏と比較したことよっての認知とも言える。第Ⅲ期での実技試験は、自身で演奏すると同時に「他者の演奏を聴く」という初めての機会でもあったことで、遠隔授業の個人練習時には得られなかった気づきが生まれたと考える。他者との違いや共通点を知ったことで自己を客観視し、学びを得たことが分かる。また、名詞-動詞の係り受け解析ではネガティブな否定形の記述が多く、歌唱援助ができなかった、練習通りに弾けなかった、声が出せなかった、緊張で弾けなかった等「自己」に向けられた反省が多くみられた。ポジティブな否定記述においても、最後まで止まらなかった、歌詞は間違えなかった等、同様に自己に向けられた反省が上位を占めていることが分かる。

続いて、同自由記述欄における共起ネットワークを図3に示す。

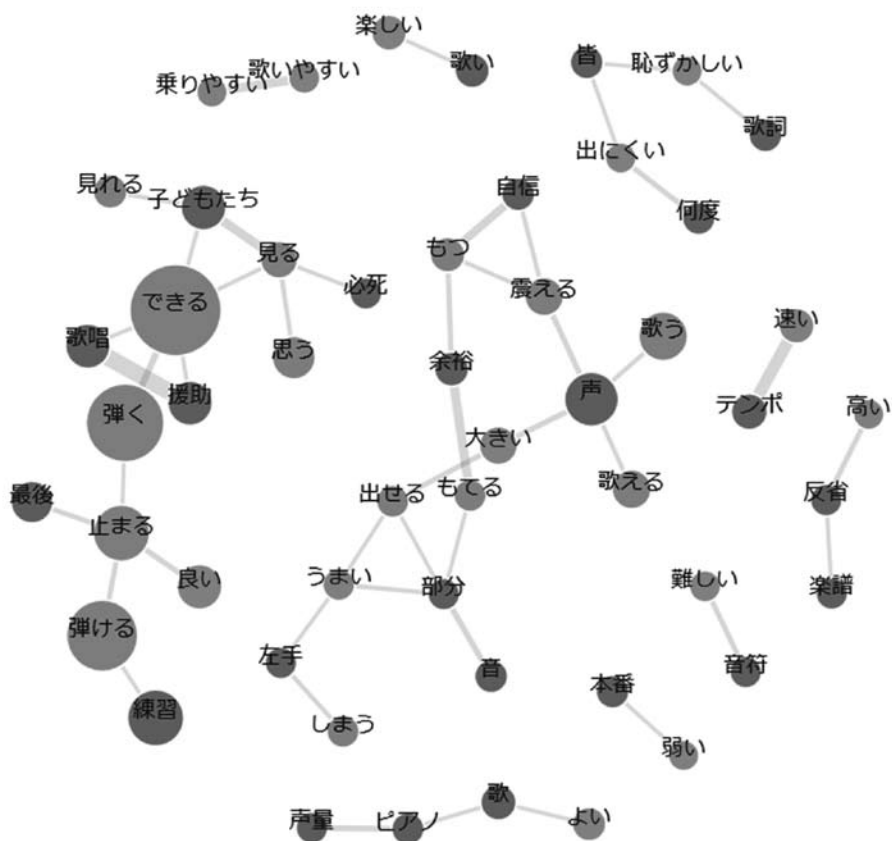


図3. 第Ⅲ期弾き歌い実技試験後における自由記述の共起ネットワーク

共起ネットワークとは、文章中に出現する単語の出現パターンが似たものを線で結んだ図である。出現数が多い語ほど大きく、また共起の程度が強いほど太い線で描画されている。第Ⅲ期では、「できる」という語に中心性があるが、より強い共起関係をもつ語には第Ⅱ期に課した指導内容がキーワードとして含まれており、具体的な指導内容を目標として達成度を測っていた傾向が見られる。また、人前で弾くことに対しての恥ずかしさについては、1回目の実技試験にのみ現れた語であった。

第Ⅲ期での実技試験終了後、前期の最終授業で2回目の弾き歌い実技試験を実施することを通知した。課題曲は「ふしぎなポケット（原曲）」、「ふしぎなポケット（簡易伴奏）」、「犬のおまわりさん（原曲）」、「犬のおまわりさん（簡易伴奏）」、「やきいもグーチーパー」、「ありさんのおはなし」、「やぎさんゆうびん」、「ゆき（簡易伴奏）」とし、曲ごとに基礎点を定めた上で学生自身が各自1曲を選択し演奏することとした。評価の基準としては、①子どもたちが歌いやすいテンポを考えながら、正確な音とリズムで演奏できているか ②最後列まで聴こえるよう歌唱できているか ③演奏が途中で止まったり、戻ったりしないかという3点を設定し、+ a として、豊かな音楽表現や歌唱援助（「さんはい」や「どうぞ」の声掛け、目線を子どもたちの方へ向ける等）ができている場合には加点がある旨を申し添えた。

3.4. 第Ⅳ期（2020年8月3日～21日）遠隔授業期

授業の形式：課題学修型遠隔授業およびオンデマンド型遠隔授業

出題方法：e-learning システム「Web Class」

配慮事項：通信環境への配慮、遠隔授業期間中の学修状況の把握、メンタルヘルスケア、後期へのモチベーションづくり

前期の授業も残すところ2週となったところで、地域における新型コロナウイルスの感染急拡大の状況を受け7月27日からの前期対面授業を中止し、遠隔授業に切り替えることが7月24日に決定された。7月27日は授業は休講だが登校日として設定し、学生の登校時間は分けないものの、各自感染に十分注意の上でこの日にロッカーから教科書等を必ず持ち帰ることを求めた。同月28日より当面の間、原則として学生の学内への入構を禁止し、特別な理由がある場合は電話等で事前連絡のうえ、許可を得ることとした。入構を許可する時間帯は、原則として9時～17時までとし、許可を受けた場合も、学内での滞在時間は

用務に必要な最小限度とすること、用務先に行く前と出校時に事務局で必ずチェックを受けることが周知された。

授業は8月3日より対面授業に代えてWeb Classによる遠隔授業を2回分(8月3日(月)～7日(金)で1回、8月17日(月)～21日(金)で1回)実施することとした。原則として、各科目の時間割の曜日にあわせて配信し、科目により2回分の課題をまとめて配信することも可とされた。音楽Iでは、1週目に音楽I(ピアノ)の前期実技試験曲(教則本と弾き歌い曲)の動画を撮影すること、2週目にはピアノの担当教員からWeb Classのメッセージ機能を使用して、夏休みの課題2曲(うち1曲は注釈付楽譜)の配信を個別に行ったが、本稿では割愛する。音楽I(幼児音楽基礎)では、第IV期の遠隔授業期が解除される見込みが立ったところで、前期最終講義で実施予定だった弾き歌い試験を第V期に実施する旨を通知した。

3.5. 第V期(2020年9月3日～)遠隔・対面授業混合期

授業の形式：遠隔授業を基本に、一部(実技・実験・実習を伴う科目、講義・演習科目でも必要性が高い場合)で対面授業を実施

出題方法：e-learning システム「Web Class」

配慮事項：通信環境への配慮、感染症防止対策、メンタルヘルスケア、遠隔授業期における課題のフィードバック、学修に対するモチベーションのフォロー

8月6日に発出された新型コロナウイルス感染症愛知県緊急事態宣言を受け、本学の緊急対策本部より、新型コロナウイルスに対する本学における活動指標と対応レベルについてカテゴリーとレベルに分け基準が設けられた。後期授業はレベル3(高度警戒)として対応することが決定し、新型コロナウイルス対策本部会議から発出された「本学の活動指針と対応について」に基づき、後期の開始は遠隔授業を基本に、一部で対面授業を実施することとなった。一部対面授業を実施する場合も、食事を伴う昼休みの高い感染リスクを考慮して、「午前のみ登校」または「午後のみ登校」とする方針とした。

授業の実施方法については、およそひと月ごとに後期時間割表の午前と午後での授業方法をパターン分けし、翌月分については2週間前までに決定・周知されることとなった。また、遠隔授業実施のガイドラインについては、遠隔授業では課題の提出や小テスト等の実施をもって出席の確認をすることとしているが、Web Classによる授業では履修科目の時

間割の時間内に必ず一度は該当科目のコースにアクセスし、課題や担当者からのメールを確認することが要件に加えられた。また、対面授業のパターン週においては、実技・実験・実習を伴う科目、講義・演習科目でも必要性が高い場合において実施可能とされ、実施する場合の手続きについては、担当教員が対面授業実施届を前の週の月曜日までに教務課へ提出することが取り決められた。学生へは同週水曜日に、翌週の「対面授業」実施一覧（確定版）として、教務課よりポータルから配信されることとなった。

第Ⅴ期においては、音楽Ⅰ（幼児音楽基礎）では第Ⅳ期での通知どおり後期初回の授業で本年度2回目の弾き歌い実技試験を行うこと、この試験に1回分の対面授業を充てるため、シラバスの学修順序や内容の変更について丁寧に説明を行った。実技試験の実施にあたっては本学が定めた「面接授業の実施に関する対応マニュアル」に基づき、発表者と聴講者との距離を十分に保った上でマスク着用を徹底するほか、窓は常時開け換気に努めた。実施後には第Ⅲ期同様「演奏曲」、「自己評価（100点満点）」、「達成点と反省点（自由記述）」の記入を課した。加えて、不安定な情勢に鑑み、学生自身が困っていることや不安をかかえていることについての記入欄も設け、各記述に対しては個別に対応し、指導にあたって音楽Ⅰ（ピアノ）担当教員との連携が必要な場合は都度報告することとした。

3.5.1. 第Ⅴ期中の実技試験について

前期末に予定していたが、休校措置により実施できなかった音楽Ⅰ（幼児音楽基礎）の弾き歌い実技試験については、9月3日と7日（各クラス後期の対面授業1回目）に実施した。実施にあたってはクラスごとに行い、第Ⅲ期同様に発表者と聴講者との距離を十分に保った上でマスク着用を徹底した。また、窓は常時開け換気に努め、クラスのおよそ半数を終えたところで10分程度の大換気を行った。

第Ⅲ期での分析同様、まず係り受け解析（表3、表4）を行った。

表3. 第Ⅴ期弾き歌い実技試験後の自由記述における係り受け解析（名詞－形容詞）

| 名詞－形容詞 | 出現頻度 | スコア | ネガティブ／ ポジティブの別 |
|-------------|------|------|-------------------|
| 声－小さい | 9 | 7.50 | ネガティブ |
| テンポ－速い | 7 | 3.73 | ネガティブ |
| 緊張－速い | 5 | 2.00 | ネガティブ |
| 子どもたち－歌いやすい | 3 | 2.40 | ポジティブ |
| 声－大きい | 3 | 0.92 | ポジティブ |

| | | | |
|--------|---|------|-------|
| ミス-少ない | 1 | 1.00 | ポジティブ |
| 息-しづらい | 1 | 1.00 | ネガティブ |
| 強弱-多い | 1 | 1.00 | ポジティブ |
| 本番-弱い | 1 | 1.00 | ネガティブ |
| リズム-良い | 1 | 0.40 | ポジティブ |
| 必死-小さい | 1 | 0.17 | ネガティブ |

表4. 第Ⅲ期弾き歌い実技試験後の自由記述における係り受け解析(名詞-動詞)

| 名詞-動詞 | 出現頻度 | スコア |
|------------------|--------|------|
| 歌唱-できる | 14 | 2.19 |
| 援助-できる | 14 | 2.19 |
| 視線-向ける | 8 | 7.20 |
| 子どもたち-向ける | 8 | 4.20 |
| 声-出る(否60.00%) | 6(否:3) | 3.33 |
| 前回-できる(否:80.00%) | 5(否:4) | 0.31 |
| 声-出す | 4 | 4.00 |
| 自信-もつ | 4 | 4.00 |
| 子どもたち-見る | 4 | 1.18 |
| 前回-弾ける | 4 | 0.57 |
| 最後-弾ける | 3 | 0.34 |

名詞-形容詞の係り受け解析では、声が小さかったことへのポイントが大幅に上がり、テンポが速くなった、緊張して速くなってしまったことは第Ⅲ期での分析同様上位に現れた。加えて、“子どもたちが歌いやすいテンポはどのくらいなのか考えるようになった”、“子どもたちが歌いやすいよう弾き歌いすることを心がけた”など、子どもたちへの新しい視点が生まれていることが分かる。名詞-動詞の係り受け解析ではネガティブな否定形の記述が減少したが、声が出せなかったという自己に向けられた反省は第Ⅲ期より出現頻度を上げた。これは、ピアノの演奏技術が向上してきたことにより歌唱の大小が目立つようになってきたと同時に、対面授業内では感染症予防(飛沫)対策のため歌唱に関する声楽的指導が十分にできなかったことの表れと反省する。また、2度目の実技試験の機会であることから、“前回できなかったことが今回達成できた”、“前回よりもできることが増えて嬉しい”、“前回できなかった歌唱援助はできるようになった”など、前回との比較も多くみられた。名詞-動詞の係り受け解析でも、“子どもたちへ視線を向けることができた(できなかった)”など子どもたち側からの視点に関する記述は増えており、全体の30%を占めた。課題に対しても前向きな記述が増え、“次回までに、自分の中で歌いやすい方法を見つけない”、“途中で速さが定まらなかったため、メトロノームを活用してテンポを一定

に保てるようにしたい”、“声の大きさよりピアノの音の方が大きく、もう少し抑え目に弾いたら遠くでも聞こえやすいと思った”、“自分の声の大きさとピアノの音量が調和できるようになりたい”など、課題に対する解決方法が、より具体性を増していることが分かる。続いて、同自由記述欄における共起ネットワークを図4に示す。

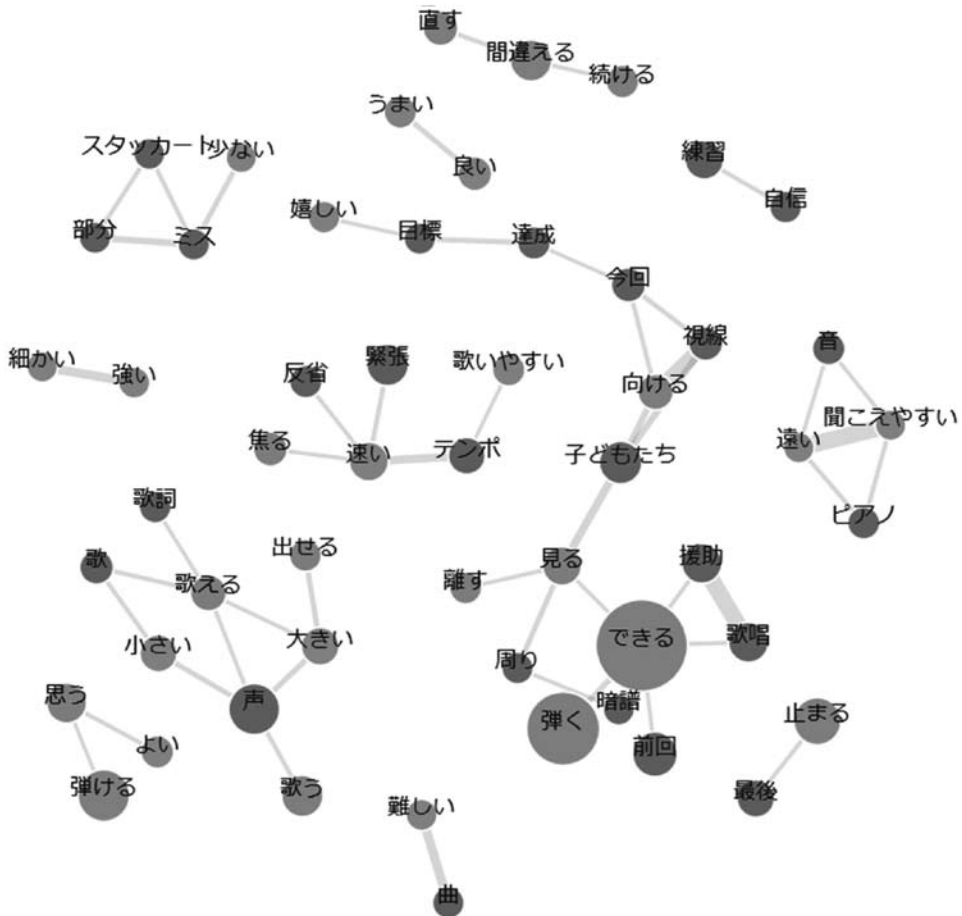


図4. 第V期弾き歌い実技試験後における自由記述の共起ネットワーク

第V期も、第III期同様「できる」という語に中心性があるが、より強い共起関係をもつ語が増え、「子どもたち」や「目標」まで共起している。これまで教員側から発していた指導内容のみならず、演奏曲こそ違うものの、学生は1回目の実技試験での経験に自己課題を見つけ、達成度を測っていた傾向がみられる。また、「緊張」の語に対して「速い」、「テンポ」、「焦る」等が共起していることから、緊張時に現れる現象や原因について自己およ

び他者の演奏聴取を通して学びを得ていることが分かる。「聞こえやすい」、「ノーマス」、「スタッカート」の語は、2回目の実技試験にのみ現れた語である。

4. まとめと今後の課題

2020年10月末現在、本学での授業は第Ⅴ期の形態で引き続き実施されている。従来であれば4月から毎週対面授業が行われていた従来と学修スタイルは大きく変化したが、第Ⅰ～Ⅴ期における音楽Ⅰ（幼児音楽基礎）での学生の学びとしては、3つのステップから成り立っていたと言える。第1段階は、第Ⅰ～Ⅱ期（非対面授業期）に実施した教員側からの具体的な助言による注釈付き楽譜とYou Tubeを利用した演奏動画を活用し、それらから各々で達成目標を設定するという個人的で内省的な学びのステップである。第2段階は、第Ⅲ期（対面授業期）に他学生の演奏を聴取できたことによる「内的目標+他者聴取からの気づき」という、客観的な学びのステップである。第3段階は、第Ⅴ期（非対面および対面授業混合期）における「自己目標達成+子ども側からの視点としての気づき」という、実践的な学びのステップである。既述のとおり教員側にも学生側にもそれぞれに困難と変更や配慮が必要とされたが、音楽Ⅰ（幼児音楽基礎）では必ずしもそのことがマイナスに働くばかりではなく、どのステップにおいても学習過程に学生自身が能動的に関わり、自己の認知活動や行動をコントロールしながら効果的に学習目標を達成していこうとする自己調整学習（self-regulated learning）の姿がみられたことと、自由記述の分析により、今回実践したような入学後の初期教育においては、非対面型学習と対面型学習を織り交ぜた授業形態が有用であったといえる。ただし一方で、非対面授業期における両手演奏（歌唱無し）から弾き歌いへの円滑な移行や、全期において感染症予防に努める中での発声法や声楽的指導には大きな課題が残った。この制限がいつ解除されるか未だ不透明な情勢のなかで、これらの課題を解消できるための新しい授業形態を取り入れながら、1年次後期および2年次への実践的な学びへ結び付けていくことが今後求められる。

碓（2020）は、オンライン教育の学習効果についての学術的な研究として、スタンフォード研究所インターナショナル（以後、SRI）によるメタ分析を挙げ、「SRIの研究では、1996年から2008年7月までに公表された実証研究の結果をまとめ、オンライン学習の有効性について検証している。その結果、全体傾向としてオンライン学習は対面式学習よりも優れた学習効果をもたらすことが明らかとなっている。特に、対面式とオンライン学習を混ぜたプログラムの学習効果が最も優れていた。この原因について、SRIは、オンライ

ンとオフラインの併用によって指導内容に多様性が生まれ、研修時に受講生に与えられる情報量が増加することが学習効果の向上に起因すると推察している。」と述べている。専門性の高い保育者の育成のため、また演習科目における遠隔授業が効果的に活用されるため、今回の分析を生かしながら ICT を活用した学習支援システムの検討にも力を入れていきたい。

5. 参考文献

- 深見友紀子、中平勝子、赤羽美希（2009）「ピアノ弾き歌いにおける遠隔・非対面指導の効果と課題」『京都女子大学発達教育学部紀要』（5），pp.31-40
- 文部科学省（2020）「令和2年度における大学等の授業の開始等について（通知）」
- 文部科学省（2020）「大学等における遠隔授業の実施に当たっての学生の通信環境への配慮等について」
- 文部科学省（2020）「新型インフルエンザ等対策特別措置法第32条第1項に基づく「緊急事態宣言」を受けた研究活動に係る考え方について（周知）」
- 文部科学省（2020）「大学等における新型コロナウイルス感染症の拡大防止措置の実施に際して留意いただきたい事項等について（周知）」
- 文部科学省（2020）「学事日程等の取扱い及び遠隔授業の活用に係る Q & A の送付について」
- 文部科学省（2020）「遠隔授業等の実施に係る留意点及び実習等の授業の弾力的な取り扱い等について」
- 渡会純一（2019）「ピアノの演奏技術向上に向けた動画教材の活用の試み—「表現技術 I（音楽）」での実践より—」『東北福祉大学教職課程支援室』2019, pp.163-176
- 碓邦生（2020）「オンラインで対面式講義と同じ効果が得られるか？は古い議論？」『日経 COMEMO』<https://comemo.nikkei.com/n/nd84a7ba41363>（2020年10月27日最終閲覧）

Effects and Problems in Learning Support for Piano Playing and Singing in Non Face-to-Face Lessons

Fuse, Erina*

新型コロナウイルスによる感染症（COVID-19）による様々な影響により、高等教育の場では対面授業を前提とした従来の教育モデルが崩壊し、本学も多大な影響を受けたところである。特に新入生は集団に帰属意識（identification）をもつことができないままに未知のウイルスに対する恐れや外出制限によって、思い描いていた大学生生活が突如遮断されたことによる不調も懸念された。

本稿では、保育者養成校での非対面型授業における弾き歌い曲学習支援を目的とし、その成果と課題を探った。4月から9月末現在に至るまで2度の休校措置を行い、その後遠隔授業および対面授業の両方を実施した本学での授業形態を全5期に分けて考察したところ、第Ⅰ～Ⅴ期における学生の学びとしては、3段階のステップから成り立っていたことが分かった。第1段階は、第Ⅰ～Ⅱ期（非対面授業期）に実施した教員側からの具体的な助言による注釈付き楽譜とYouTubeを利用した演奏動画を活用し、それらから各々が達成目標を設定するという個人的で内省的な学びのステップである。第2段階は、第Ⅲ期（対面授業期）に他学生の演奏を聴取できたことによる「内的目標+他者聴取からの気づき」という、客観的な学びのステップである。第3段階は、第Ⅴ期（非対面および対面授業混合期）における「自己目標達成+子ども側からの視点としての気づき」という、実践的な学びのステップである。どのステップにおいても学習過程に学生自身が能動的に関わり、自己の認知活動や行動をコントロールしながら効果的に学習目標を達成していこうとする自己調整学習（self-regulated learning）の姿がみられたことと、自由記述の分析により、今回実践したような入学後の初期教育においては非対面型学習と対面型学習を織り交ぜた授業形態が有用であったといえる。ただし一方で、非対面授業期における両手演奏（歌唱無し）から弾き歌いへの円滑な移行や、全期において感染症予防に努める中での発声法や声楽的指導には大きな課題が残った。この制限がいつ解除されるか未だ不透明な情勢のなかで、これらの問題を解消できるための新しい授業形態を取り入れながら、1年次後期および2年次への実践的な学びへ結び付けていくことが課題である。

専門性の高い保育者の育成のため、また演習科目における遠隔授業が効果的に活用されるため、今回の分析を生かしながら今後はICTを活用した学習支援システムの検討にも力を入れていきたい。

キーワード：ピアノ，弾き歌い，非対面型授業，学習成果

*Nagoya Ryujo Junior College

